

ルシン語サブカルパチア方言における過去完了¹

—過去完了の用法、語順について—

田中 祐真

序論

ルシン語は東スラヴ語群に属するとされる言語であるが、文法的にはコピュラの現在形や代名詞の接語形（短形）が用いられたり、再帰動詞の *ся* が動詞とは離れた位置に現れるなど、西・南スラヴ語群と共通する特徴も有する。

また、ルシン語のサブカルパチア方言では標準ウクライナ語と同様に過去完了時制が存在する。「ルシン語サブカルパチア方言は、レムコ語などその他のルシン語と異なり、十分に発達した過去完了時制を持っている」² とされ、ルシン語の諸方言のうちサブカルパチア方言のみが過去完了時制を有しており、また広く用いられている。

しかし文献の絶対数が少ないこともあり、ルシン語サブカルパチア方言の過去完了時制については形態のみ示した文献はあるものの、過去完了形の語順や意味、用法を詳細に述べた文献は見当たらなかった。

本稿では、サブカルパチア方言で書かれた文献において用いられている過去完了形を意味的側面と形式的側面から分析し、意味、用法、語順の傾向をより明らかにすることを目指す。

以下では、サブカルパチア方言で書かれた文章の分析をもとに、過去完了の形式的側面、意味的側面を論じる。今回過去形、過去完了形の文例は学術的文体の例として論文一点³、文学的文体の例として散文小説一点⁴、散文・韻文集一点⁵ から採取した。ただし、通常の文体と異なる可能性があるため、今回は韻文は収集の対象外とした。

¹ 本稿は平成 26 年度東京外国語大学外国語学部ロシア語科に提出した卒業論文をまとめたうえで修正を加え、後の研究により判明した事項を加筆したものである。

² Stefan M. Pugh, *The Rusyn Language* (Munich: Lincom, 2009), p. 141.

³ *Удвари І. Образчики з історії пудкарпатських Русинув - XVIII. століття* Изгядованя з історії культури и языка. Ужгород, 2000. (本文のうち主にルシン語で記述されている箇所は全 324 ページ, 以下 Обр.)

⁴ *Олбрахт ІІ. Смутні очі Анці Караджічової*. Ужгород, 2013. (同全 129 ページ, 以下 Сму.)

⁵ *Керча І. Утцюзнина - Читанка про недільні школы*. Ужгород, 2013. (同全 184 ページ, 以下 Утц.)

1. 意味的側面

本稿冒頭で述べたとおり、今回参照した文献中では過去完了形の形態などに関しては示されていたものの、その意味、用法に関しては英語を例に「完了 "I have done X" や単純過去 "I did X" と対立する "I had done X"」⁶ などと示されるにとどまる。

本項ではサブカルパチア方言における過去完了の意味、用法についてより詳細に分析する。

1-1. 他の印欧語における過去完了の意味、用法

サブカルパチア方言の過去完了の意味、用法を探る上での参考として、他の印欧語における過去完了について参照しておく。

スラヴ諸語以外の言語では、たとえば現代フランス語では「過去のある時点を基準として、その時すでに完了していた行為」⁷ を表すとされる。

現代ドイツ語では「現在完了形が現在の事柄に対して相対的な性格を持っているのと同様な意味で、原則として過去完了形は過去の事柄に対して付随的に用いられるものである。さらに、現在完了形がほぼ過去形と同じく独立的な事柄の表現にも用いられるのと同様に、過去完了形も独立的な用い方をされる場合がないではない」⁸ とされる。また、「過去形で表された事柄に対して、完了せる事柄ないしはそれに先んじて起こった事柄を表すのに用いられる [中略] この性格を利用して、話の本筋に入るまでの前置きの部分に過去完了形が連用されることがある」⁹ とされる。さらにドイツ語の場合、「過去完了形が過去形で述べられている過去の事柄よりも後の出来事を表すのに用いられている」¹⁰ 場合もある。このような用法があるのは、「ただ平静に過去の一連の物語として叙述するよりは、その箇所だけ特に完了の事実性を強調し、話者の立場からの心理的なつながりの意識を持って用いているから」¹¹ だとされる。

また、同じスラヴ語派に属する言語では、古語である古代教会スラヴ語で「発話の瞬間より前のある時点に先立って行われた動作の結果が、その時点となんらかの関連性のある

⁶ Pugh, *The Rusyn Language*, p. 141.

⁷ 大木健『整理と解説 フランス文法』研究社、2008年、118-119頁。

⁸ 浜崎長寿、野入逸彦、八本木薫『<ドイツ語文法シリーズ>4 動詞』大学書林、2008年、76-77頁。

⁹ 同上 77-78頁。

¹⁰ 同上 79-80頁。

¹¹ 同上 80頁。

場合に用いられる」¹²とされている。

現代ブルガリア語でもほぼ同じく「過去のある時点以前に生じた事実を述べるのに用いられる」¹³とされる。

ルシン語と非常に近縁なウクライナ語においては、「過去において他の動作よりも前に起こった動作と、過去において完了した動作を意味する。」¹⁴とされる。

以上をまとめると、他の印欧語において過去完了形は、過去形で表される事柄と比べて相対的に以前に行われた行為を表す先時的意味すなわち大過去用法と、過去のある時点以前に完了した動作の結果が残っているという完了的意味の少なくとも2つの意味を持つ。

1-2. サブカルパチア方言の過去完了の意味、用法

他の印欧語における過去完了の意味、用法に関する記述からすると、いずれの言語でも「過去形で表される過去のある時点」との関係が重要なものとなっている。また、特に単文で用いられている場合など前後の文と関わりのある場合が想定されるので、過去完了形が用いられている文の前後の文脈も考慮しなければならない。ただし、今回収集した例文の中では他の節や前後の文において過去の時点が明確に表されていないと考えられる場合もあった。

また、サブカルパチア方言も他のスラヴ諸語同様、動詞の完了体、不完了体を区別するため、過去完了形となっている動詞の体にも注目しなければならない。

過去完了形で用いられている動詞が完了体であるものが48例、不完了体であるものが16例であった。¹⁵ 文献ごとに分けると、Обр.において完了体動詞が35例、不完了体動詞が10例、Сму.において完了体動詞が6例、不完了体動詞が6例、Утц.において完了体動詞が7例、不完了体動詞が0例であった。

今回収集した63の例文中で単文において過去完了形が用いられていたのは6例のみである。文献ごとの数では、Обр.が5例、Сму.が0例、Утц.が1例であった。

残り58例は関係詞や接続詞等につながった複文である。

以下では各例文を不完了体動詞を用いている例と完了体動詞を用いている例とに分け、

¹² 木村彰一『古代教会スラヴ語入門』白水社、1985年、139頁。

¹³ 佐藤純一「ブルガリア語」亀井孝、河野六郎、千野栄一編『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1)』三省堂、1992年、837頁。

¹⁴ Муцинская В.В. Украинская грамматика в таблицах и схемах. СПб., 2014. С. 121

¹⁵ 63の例文のうち、一文で過去完了形の動詞が2つ現れている例文があったため、同一の動詞ではあったが数としては2つと計上した。よって、動詞の過去完了形の例として数えると、今回は64例収集したことになる。

必要であれば前後の文とともに示して意味と用法を分析する。¹⁶

1-2-1. 不完了体動詞を用いた過去完了の文

次の例文は非常に明確に先時的意味を表す。

- (1) Старый сів на столиць побуч Іва Караджіча, де *сиділа* *была* переже
where sit.IPFV.PST.F be.PST.F earlier

Ганеле.

Hanele [Сму. С.97]

“老人は、先程ハネレが座っていた、イヴォ・カラヂチの隣の椅子に座った”¹⁷

ここでは *сиділа была* “座っていた”は、老人が *сів* “座った”よりも以前に行われていた行為であり、状況語 *переже* “より前に”によって先時的な用法だということが一層明らかになっている。

このように、不完了体動詞を用いて過去完了を表した場合、過去形で表される基準点より以前に行われてきた動作を表す、大過去の意味を持つと考えられる。今回収集した例のうち不完了体動詞を用いている例はすべてこれに当てはまる。

次の例文も不完了体動詞を用いており、先時性を表す大過去用法ではあるが、上で挙げた例とは少々異なる部分がある。

- (2) Хоть и *даровав* *быв* граф Ференц Карої *василіянам* свуй
though give.IPFV.PST.M be.PST.M count_Ferenc_of_Kara.NOM Basilian.PL.DAT
тутишний бірток, они регулярно хожовали межи вірники, збераючи
his_own_local_estate.SG.ACC
квесту (милодары). [Обр. С.162]

“カラのフェレンツ伯爵が自身の所領を聖大ワシリー教団員に寄贈していたにもかかわらず、彼らは献金を集めながら定期的に信者たちのところを行き来していた。”

¹⁶ 本節における例文では文脈を明確にするため前後の文を付け加えることもあり、訳文が長くなる場合がある。そのため、訳文中で過去完了形が用いられている文、節を明確に示すために太字を用いる。

¹⁷ 日本語訳は筆者による。以下同。

この例文では、聖大ワシリー教団員らが *хожовали* “何度も行き来した” という行動を起こす以前に伯爵が所領を *даровав* “寄贈した” という行為が行われていたと解釈できる。

ここで問題なのは、動詞 *даровати* が不完了体動詞であるということである。“寄贈していた” のならば所領の寄贈という行為が既に完了してしまっているため完了体動詞を使用しても良いはずであるが、不完了体動詞となっている。これは、伯爵による“寄贈する” という行為が完了した結果として教団員たちが“行き来した” のではなく、“寄贈した” という行為には関係なく“寄贈する” という行為の起点よりも後に“行き来する” 行為を行っていたからだと思われる。また、本来なら「伯爵が所領を寄贈した」ならば「教団員たちは献金を集めに信者の間に行き来する必要はなくなった」という因果関係が成立するはずであるという筆者の主観による判断が *хоть и* “～にもかかわらず” という表現から垣間見え、しかし実際にはこの因果関係が成り立たなかった、ということから不完了体動詞が選択されていると考えられる。

この例のように、単純に過去の基準点におけるある動作が行われる以前に行われていた行為を表すのではなく、それぞれの動作の因果関係が無い、もしくは否定されているために不完了体動詞が選択されている例はこの 1 例のみであると思われる。

次の例文でも不完了体動詞が過去完了形で用いられているが、その基準となる過去の時点を示す箇所が上に示した他の例文と比べると明確ではない。

- (3) Ёго богатое рукописное наслідство, котрое порядковав до послідного дня живота, на жадость фамілії, пошорив и передав у бібліотеку рукописув Мадярської Академії Наук мадярський історик восточної Європы Ёвжеф Периній, зробивши доступним про зглядователюв из 1964-1965. года. У бібліотеці рукописув Мадярської Академії Наук, окрем многочого иншого уд Годинки, мож найти множество оригінальных документув и копій из історії Русинув. Туй находят ся и збирькы русинських народных співанок уд розличных зберателюв, котрі Годинка *усиловав ся був* приладити
REL Hodinka.NOM try.IPFV.PST.M REFL be.PST.M to_prepare
у печать.

for_printing

[Обр. С.50]

“(ホディンカが) 人生最後の日まで管理していた、彼の豊富な手記の遺産は、家族の希望でハンガリー人の東欧史家ヨウジェフ・ペリニイが整理してハンガリー科学アカデミー手記図書館に譲り渡し、1964年から1965年に研究者たちが利用できるようにした。ハンガリー科学アカデミー手記図書館にはホディンカの他の多くの文書の他

に、ルシンの歴史に関する大量の原典や写本が見られる。ここに、**ホディンカが出版の準備をしようとしていた**、さまざまな収集家から集めたルシンの民族歌集がある”

この例文においては不完了体動詞 *усиловати ся* “～しようとする”が関係詞節において過去完了形となっているが、主節においても直前の文においても現在時制となっており、2つ前の文において動詞の過去形が用いられている。2つ前の文においては関係節において *порядковав* “管理していた”，主節において *пошорив* “整理した”，*передав* “譲った”という動詞が用いられており、文の形式から判断するとこの例文における過去完了形の基準となる過去の時点は *пошорив* “整理した”，*передав* “譲った”によって示されていると推測される。その場合文の形式上は、ヨウジェフ・ペリニィが *пошорив* “整理した”，*передав* “譲った”という行為を始める以前にホディンカが *усиловав ся быв* “～しようとしていた”という先時的意味を表すと解釈できる。

しかしながら、この箇所ではホディンカの生前と死後での彼の蔵書の扱いに関する話題が出ているため、明確に示されていないが、文脈を踏まえるとホディンカの死んだ時点が基準点となり、生前に行っていた行為ということで過去完了形が用いられている可能性も考えられる。だとすれば、筆者（話し手）と読者（聞き手）の間で、ある過去の行為とそれによる結果が文脈によって前提条件として了解されているならば、より以前の行為を表す際に過去完了形を用いることができることになる。

ただし、不完了体動詞 *усиловати ся* は法性を表す動詞であり、対応する完了体動詞はない（形態から予想される完了体動詞は *усилити ся* であるが、この動詞は“強くなる，高まる”という意味を持つため、“～しようとする”という意味を表す *усиловати ся* に対応する完了体動詞ではない）ため、必然的に不完了体動詞である *усиловати ся* を用いざるを得ない可能性も考えられる。しかし、この直後の文で “*Пила года 1922 пуд назвов Сто наших співанок одну сяку збирьку ай зладив быв готову, котра пак уйшла в Ужгороді года 1993.*” [Обр. С. 50] (1922 年頃に「私たちの 100 の歌」の名前でこのような歌集のひとつが準備され、のちの 1993 年にウジュホロドで出版された。) とあることから、例文中で *усиловав ся быв приладити в печать* “出版の準備をしようとしていた”という時点では出版の準備は全体としては完了していなかった（出版の準備ができているものもあれば、できていないものもあった）と判断できるため、いずれにしても文脈から判断するとここでの過去完了形は先時的意味を表していると思われる。

このように過去の基準点が明示されず、筆者（話し手）と読者（聞き手）の暗黙の了解に基づくと思われる例は上記のものを含めて 3 例あった。

以上の例の分析結果をまとめると、不完了体動詞の過去完了形が用いられた場合、基本的に前後の文もしくは他の節にて示された過去のある時点を基準として、それより以前に行われていた、もしくは動作の起点がある先時的な行為をあらゆる大過去の意味を表すと思われる。動詞が不完了体であることや例文中の文脈を踏まえると基本的に比較的長期間ないし長期間に渡る行為、多回的な行為を表すが、例文(2)のように過去のある時点において動作が完了していないか、動作の完了に重点が置かれていない場合もあるようである。また、例文(3)のように過去のある時点が明瞭には示されず、文脈上基準点が明らかとなっている場合にも用いられる可能性がある。

また、今回収集した過去完了形の例の中でいわゆる法性を表す動詞 (modal verb) は、対応する完了体があるものもすべて、不完了体で用いられていた。不完了体動詞による過去完了形は動作の完了による結果を表さず単に基準となる時点以前の動作を表すので、この性質と法性を表す動詞の親和性が高いのだと考えられる。

1-2-2. 完了体動詞を用いた過去完了の文

(4) *Онъ одтогды надале зачав ся варош называти Берегсас на знак того, же основали го Сасы.*

На тот час населники Сасы уже ся были

at_that_time settler_of_Sas.PL.NOM already REFL be.PST.PL

помадярили.

Magyarise.PFV.PST.PL

[Утц. С.66]

“その時からあと、その町はサス人が創立したという印としてベレグサスと称しはじめた。当時サス人の移住者らはすでにマジヤール化してしまっていた。”

この例文では、過去完了の基準点となる行為は前の文における *зачав* “始めた” で表されている。過去完了形となっている動詞 *помадярити* “マジヤール化する” が完了体動詞であるため、この例における過去完了形は *помадярити* “マジヤール化する” という動作が、町がベレグサスと称しはじめるまでに既に完了し、その結果が残存していることを表していると思われる。状況語である *уже* “すでに” によって完了の意味合いが一層明瞭となっている。

このように、過去完了が完了体動詞によって表される場合は基本的に、過去形で示される過去の時点までに動作が完了し、結果が残存していることを表す完了用法であると考えられる。今回収集した例のうち完了体動詞を用いた過去完了の例文は、すべてこれに当て

はまると思われる。

過去完了の基準となる過去の時点は基本的に過去形で表されるが、過去の基準点が現在形で表されているものが1例あった。しかしここでの現在形は、過去の出来事をあたかも今日の前で展開されている物語であるかのように描写する、いわゆる歴史的現在である。

- (5) Года 1920, хоть и *дустав быв* зазвания на Карлув Універзітет до Прагы, although obtain.PST.M be.PST.M invitation_to_Charles_University.ACC to_Prague ведно из своим універзітетом и своима студентами евакуе ся з Братіславы, и дакий час сеся высша школа фунгуе у Будапешті, пак у Пийчу. [Обр. С.44]
“1920年には、**プラハのカレル大学への招待を受けていたにもかかわらず**、自身の大学と学生とともにブラチスラヴァから引き上げ、ある時この大学はブダペストで、後にはペーチで開校していた。”

また、過去の基準点が明確には示されていないと思われる例が6例あった。以下にその一部を挙げる。

- (6) У туй хвилі прийшов до загороды из навщивов Пінхес Якубович. Сів на ребро деревляной дейжі из мокров райбанинов, пониковав на огник, што черленным языком лиже дно котла, слухав што обі жоны говорят. У Полянї не є много діл, за котрі бы ся не говорило прилюдно, хоть и перед цілым селом, а же Пінхес часом прийде, посидит хвильку, много не говорит, тай зась собі йде дале, на тото *были звыкли*. to_that be.PST.PL get_used.PFV.PST.PL [Сму. С.55]

“その時庭先にピンヘス・ヤクボヴィチがやってきた。濡れた洗濯物の入った木桶の縁に腰掛けて、大鍋の底を赤い舌で舐める火を眺めながら、二人の女の話聞いていた。ポリャーナでは人前で、まして村全体の前で話せないような物事は多くない。というのもピンヘスがときどきやって来て、ちょっと座って、あまり話さず、そしてまた次の場所に行くのだから。**それにも慣れてしまっていた。**”

ここでは前の文のピンヘスの行動を表す *прийшов*“来た”, *сів*“座った”, *пониковав*“見ていた”, *слухав*“聞いていた”という過去形が使われているため、これらの動作が行われる以前に *звыкли были*“慣れてしまった”と解釈することはできる。

しかしこの場合、文脈から判断すると *звыкли были*“慣れてしまった”のはピンヘスが日頃からやって来て話を聞いては出ていく、ということに関してだと思われる。そうだとす

れば、過去から現在にかけて日常的に行われている習慣的な動作を基にしていることになり、基準となる過去の時点は明確ではなく、対象となる動作がかなりの時間的広がりを持っている。

このことを踏まえると、この例においては過去完了形は文中に明確に示されていない、「習慣的行為が行われ始めてからしばらく後の、現在からかなり以前のある時点」までに完了し、その結果が残存していることを表していると思われる。これも例文(3)と同様、基準点となるべき時点は、文脈の助けにより筆者(話し手)と読者(聞き手)の間にある、明示されない共通認識の中に漠然と存在している可能性がある。

上記の例を見ると、「慣れる」という行為の性質上、いつの時点で「慣れた」かが明確になることはありえないが、しかしかなり以前のいつかの時点で「慣れる」という行為が完了していることは明らかであるために、基準点を明示しない完了用法となっていると考えられる。

1-2-3. 意味、用法のまとめ

以上のことをまとめると、過去完了の意味、用法は以下ようになる。

- 過去完了の意味、用法を決定する第一の要素は動詞の体である
- 基本的に、動詞が不完了体であるときは過去形で表される過去の時点を基準とした先時的意味を表し(大過去用法)、過去の基準点までに比較的長時間ないし長期間にわたって行われた行為や、多回的に繰り返されてきた動作を表す。動詞が完了体であるときは過去形が表す基準点としての過去のある時点までに動作が完了し、その結果が残存していることを表す(完了用法)
- 過去完了形によって表される動作の結果と過去のある時点における行為との間につながりがあることを表す必要がないとき(もしくは動作の結果を理由とした行為ではないとき)、過去完了形は不完了体動詞によって表される
- 過去完了の基準となる過去の時点は、動詞の過去形によってのみならず、文脈から筆者(話者)と読者(聞き手)の間で、ある過去の事実が了解されている場合、動詞の過去形によって示されない場合がある
- 基準となるような過去の時点が多回・習慣的行為によって示されるために明確で無い場合、文脈から筆者(話者)と読者(聞き手)の間で暗黙のうちに漠然と認識されている、現在からかなり以前の過去に完了した行為を表す場合がある

2. 形式的側面

ルシン語サブカルパチア方言において、過去時制は‘本動詞の-I分詞形¹⁸+бытиの現在形’または‘人称代名詞+本動詞の-I分詞形’で表され、過去完了時制は‘過去形+бытиの-I分詞形’で表される。

過去完了形の構成法は他の印欧語と近似している（フランス語‘助動詞 avoir, être の半過去+過去分詞’：Le train *était parti*. ‘列車はすでに発車してしまっていた’，ドイツ語‘sein, haben の過去形+過去分詞’：Er *war gekommen*. ‘彼は来ていた’）。

しかし、サブカルパチア方言においては過去完了を表す各構成要素の語順にはいくつかのヴァリエーションがある。過去完了形の語順を論じる前に、過去完了形を構成するものとなる過去形の語順について記述する。

1-3. 過去形の語順

過去形の作り方は二通りあるが、そのうち быти の現在形が現れないものは語順を問題としくいため、быти の現在形が現れるもののみ取り上げる。

全 245 例文中の過去形の語順のパターンは以下のとおり。

- A быти の現在形 - 本動詞の-I分詞形 — 56 例, 22.9%
- A' A の быти の現在形と本動詞の-I分詞形の間 *ся* や *не* 以外の語が入り込んだもの — 36 例, 14.7%
- B 本動詞の-I分詞形 - быти の現在形 — 153 例, 62.4%

パターン A, A' は、быти の現在形が本動詞よりも先にくる語順である：

- (7) Не чудуй ся, - каже Юркови, - же-м *прийшов* до тебе.
 be.PRS.1SG come.PTCPM [Утц. С.24]
 “「私が君のところに来たことを驚かないで」とユルコに言った”

¹⁸ 以下では形式的側面に注目するため、*быв, была...*のように -в, -ла, -ло, -ли に終わる動詞形自体は‘-I分詞形’とし、‘過去形’という用語は人称代名詞やコピュラと組み合わせさせて過去時制を表す形全体を意味するものとする。また、以下の例文中のグロスもそれに準じて‘-I分詞形’を *PTCP* (分詞) として表す。

パターン B は本動詞が **быти** の現在形より先に来る語順である：

- (8) *Бесідовали сьме за тя из мамков.*
 talk.PTCP.PL be.PRS.1PL [Сму. С.57]
 “お前のことをママと話したよ”

1-4. 過去完了形の語順

全 63 例文のうち、過去完了形の語順のパターンは以下のとおり。

- A **быти** の-I 分詞形 - 本動詞の-I 分詞形 — 7 例, 11.1%
 A' A の **быти** の-I 分詞形と本動詞の-I 分詞形の間 **ся** や **не** 以外の語が入り込んだもの
 — 3 例, 4.7%
 B 本動詞の-I 分詞形 - **быти** の-I 分詞形 — 46 例, 73.0%
 B' B の本動詞の-I 分詞形と **быти** の-I 分詞形の間 **ся** や **не** 以外の語が入り込んだもの
 — 2 例, 3.1%
 C **быти** の現在形 - 本動詞の-I 分詞形 - **быти** の-I 分詞形 — 2 例, 3.1%
 D 本動詞の-I 分詞形 - **быти** の現在形 - **быти** の-I 分詞形 — 3 例, 4.7%

A, A', B, B' は **быти** の現在形が現れていない。このように **быти** の現在形が現れない例文は全体の 9 割以上を占める。

C, D は **быти** の現在形を除いた **быти** の-I 分詞形と本動詞の-I 分詞形の語順はパターン B と同様である。したがってこれらの語順は B のうち **быти** の現在形が現れているものと解釈できる。だとすれば、パターン B とそのヴァリエーションのみで全例文のおよそ 8 割を占める。

パターン A, A' は **быти** の-I 分詞形が本動詞の-I 分詞形よりも前にくる語順である：

- (9) *Окрем єдного документа из першої половкы XVIII. столїтя, што го были*
 написали у Буштинї, вшиткі інші писанї были у Салдобошу.
 write.PTCP.PL [Обр. С.218-219]

“ブシュティノで書かれた 18 世紀前半のひとつの文書を除いては、他のすべての文書はサルドボシュにあった。”

パターン B, B'は *быти* の-I 分詞形が本動詞の-I 分詞形よりも後に来る語順である：

- (10) У першум ряді *приладили* *были* у рукописах много работ на тему історії цирьковли.
prepare.PTSP.PL be.PTSP.PL [Обр. С.19]

“まず第一に、手記には教会の歴史についての多くの著作が準備されていた”

パターン C では *быти* の現在形が本動詞の-I 分詞形よりも前に現れている：

- (11) Добрі я тямлю, што-м *повбіцяв* *быв* 1789-го года...
be.PRS.1SG promise.PTSP.M be.PTSP.M [Обр. С.85]

“私は 1789 年に約束したことをよく覚えている”

過去完了形のそれぞれの構成要素の間に別の語句が挿入されているものは今回収集した文例中にはなかった。

パターン D では *быти* の現在形が本動詞の-I 分詞形と *быти* の-I 分詞形との間に入っている：

- (12) Хотів *см* *быв* жидувську общину полянську за єї неправедності
want.PTSP.M be.PRS.1SG be.PTSP.M
рострошити пруютом желізным, як судину горчарську, и розметати ю, як пісок у пустыни.
[Сму. С.86]

“私はユダヤ人地区を、その不実さのために鉄の棒で陶器のように打ち壊し、砂漠の砂のように撒き散らしてやりたかった”[Олбрахт, 2013:86]

1-5. 過去形、過去完了形の語順に関する考察

今回収集した例文を見てみると、過去形、過去完了形の語順は文、節における統語的構成要素 (syntactic constituent) の順番に注目すると一定の法則性があることがわかる。

これを踏まえると、語順を決定する上での傾向は以下のようなになる。

- 否定の *не* は本動詞の直前に来る：例文 (13)
- *быти* の現在形が現れている場合、*быти* の現在形は構成要素の 2 番目の位置に来る：(13), (14)

- *быти* の現在形が現れ、かつ本動詞が *ся* 動詞であるとき、*ся* は *быти* の現在形の直後に来る：(14)
- 従属節において過去完了形の語順は‘本動詞の-*l*分詞形 - *быти* の-*l*分詞形’の語順となる：(15)
- 過去完了形において *быти* の現在形が現れないとき、*быти* の-*l*分詞形が構成要素の2番目の位置に来る：(16)
- 過去完了形において *быти* の現在形が現れず *ся* 動詞の場合、*ся* が優先的に構成要素の2番目の位置に来る。その場合 *быти* は *ся* の直後となる：(17)

(13) Чом *есь* не *зняв* клебаню?
 why be.PRS.2SG not take_off.PTCP.M hat.SG.ACC [Сму. С.34]
 “なぜ帽子を取らなかったの?”

(14) *Пробудив* *єм* *ся* и не годеи *єм* дале спати.
 wake_up.PTCP.M be.PRS.1SG REFL [Утц. С.61]
 “目が覚めてもう眠れない”

(15)(=1) Старый *сїв* на столиць побуч Ива Караджича, де *сидїла* *была* переже
 where sit.PTCP.F be.PTCP.F earlier
 Ганеле.
 Hanele.NOM [Сму. С.97]
 “老人は、先程ハネレが座っていた、イヴォ・カラヂチの隣の椅子に座った”

(16) Горський вінець лісоватых Карпат *быв* принципіально *муцнійшов*
 summit_of_wooded_Carpathians.NOM be.PTCP.M in_principle become_stronger.PTCP.M
 культурнов границев, гикой мадяро-русинська вадь словако-русинська языкова границя.
 as_cultural_border [Обр. С.10]
 “カルパチアの森林の多い山頂が、マジャール語とルシン語もしくはスロヴァキア語とルシン語の言語的境界線のように、文化的な境界線として原則的に強くなっていた”

(17) Утця юй, Петра Зрінія, што *ся* *быв* *збури*
 CON REFL be.PTCP.M revolt.PTCP.M

против немилосердности віденського уряду, противозаконно засудили на смерть.
against_merciless_Vienese_government [Утц. С.155]

“彼女の父、ペトロ・ズリニィは、無慈悲なウィーン政府に対して叛乱を起こしていたのだが、違法に処刑された”

しかし、この傾向から外れる例も多く存在する。

そのため、ここでさらに接語どうしの語順や文中、節中での接語の位置に着目すると上記の傾向から外れる例についても説明が付き、より正確な傾向を見出すことができる。

ルシン語のサブカルパチア方言においても種々の接語が存在するが、特に過去形、過去完了形の形成に関わるものとして一、二人称における **быти** の現在形と再帰動詞の **ся** があげられる。

Franks&King は西・南スラヴ語群の言語の接語の分析から、接語群中での再帰接語と助動詞接語の位置について以下のように述べている。¹⁹

- 再帰接語は代名詞接語群の端の特定の位置に置かれ、どちらの端に置かれるかは言語によって、また接語によって決定される
- 三人称単数の助動詞接語は接語群の末尾の位置に置かれ、その他の助動詞接語は接語群の頭位に置かれる

ルシン語にこの傾向を適用するならば、**ся** は **быти** の現在形の前後どちらかにのみ置かれることになる。このことは上述の“**быти** の現在形が現れ、かつ本動詞が **ся** 動詞であるとき、**ся** は **быти** の現在形の直後に来る”という傾向に合致する。今回収集した例のうちこの法則から外れるものはないことから、ルシン語においては再帰の **ся** は接語群（この場合は **быти** の現在形）の右端に置かれる傾向があると思われる。またルシン語サブカルパチア方言においては三人称では過去形、過去完了形の形成の際に **быти** の過去形を用いないため、“その他の助動詞接語は接語群の頭位に置かれる”という傾向とも合致する。

Franks&King は接語群の文中での位置についても傾向を詳細にまとめているが、主なものを以下に挙げる。²⁰

¹⁹ Steven Franks and Tracy Holloway King, *A Handbook of slavic clitics* (New York: Oxford University Press, 2000) p. 215.

²⁰ *Ibid.* pp. 248-249.

- セルビア・クロアチア語, チェコ語, スロヴァキア語, スロヴェニア語は基本的に接語が2番目の位置に置かれる言語 (second-position clitic language) である
- 2番目の位置とは2番目の統語的構成要素 (syntactic constituent) を表す
- 従属節においては補文標識 (complementizer) が1番目の位置とみなされる
- 普通, 接語は動詞に先行する。他の構成要素に接語が付かないとき, 接語でない動詞形に付く
- 2番目の位置からのずれは以下のように起こる。接語が1番目に置かれる構造は(i) 1番目の構成要素が省略されたとき (チェコ語, スロヴェニア語), (ii) 1番目の構成要素が独自の韻律句を形成するとき (セルビア・クロアチア語, チェコ語, スロヴェニア語) に現れる。普通1番目の構成要素が節の残りの部分から韻律的に分離しているとき, 接語は1番目の構成要素の後よりも後ろに現れうる
- 動詞に隣接する接語は可能であれば動詞に先行する

本項冒頭に挙げた傾向から, ルシン語サブカルパチア方言も基本的に接語が2番目の位置に置かれる言語であると思われる。

上記の文中, 節中での接語群の位置の傾向について注目したいのは, 特に“普通1番目の構成要素が節の残りの部分から韻律的に分離しているとき, 接語は1番目の構成要素の後よりも後ろに現れうる”という点である。すなわち, 「頭位にある構成要素が節中の残りの要素から休止 (pause) によって分離され, その際に接語は2番目の構成要素に付く」。²¹ つまり接語群は, 休止が入った場合はその直後からが節の構成要素として計上されるかのような位置に置かれるために, 見かけ上3番目以降に置かれることがある, ということである。

今回収集した例文の中にもこの現象が見られるものがある。

- (18) Зато з інтересом єм переникав майновійшу, 1993-го года,
 but_then with_interest be.PRS.1SG survey.PTCP.M newest.ACC 1993
 монографію из історії пудкарпатських Русинув, ...
 monograph.ACC about_history_of_Subcarpathian_Rusyns [Обр. С.34]
 “その代わり, 興味から 1993 年の最新のサブカルパチア・ルシンについてのモノグラフを調べた”

²¹ *Ibid.* p. 229.

この例文では文頭の *зато* “その代わりに” の後に休止が置かれ、残りの部分と切り離すことができるために、接語の *єм* が 3 番目の位置となっていると思われる。

また、“接語が節の中で 2 番目の位置に置かれる” という原則を考慮すると、たとえば上述の “過去完了形において *быти* の現在形が現れないとき、*быти* の *-l* 分詞形が構成要素の 2 番目の位置に来る” という傾向に当てはまらない例にも説明が付く。

(19)(=9) *Окрем єдного документа из першої половкы XVIII. столїтя, што го*

except_one_document from_first_half_of_18th_century CON 3SG.ACC
были написали у Буштинї, вшиткі инші писанї были у Салдобошу.
be.PTCP.PL write.PTCP.PL in_Bushtyno all_other_writings.NOM be.PTCP.PL in_Saldobosh
[Обр. С.218-219]

“ブシュティノで書かれた 18 世紀前半のひとつの文書を除いては、他のすべての文書はサルドボシュにあった。”

この例では男性三人称単数代名詞の対格接語形である *го* が優先的に 2 番目の位置に来ているため、*были* が 3 番目の位置に置かれている。

2. 今後の課題

今回文献から例文を収集して分析を行ったが、最も大きな問題点として文献数、例文数ともに決定的に不足していることがあげられる。分析することができた例の数が非常に少ないために、今回見出した結論には一般的に認められるとは言いがたい部分もある可能性が多分にある。

今後の研究においてはさらに多くの文献を収集するとともに、現地の母語話者から口頭での音声サンプルを採取して分析の対象となる例を増やしていきたいところである。

また、ルシン語の接語に関しては未だ研究が進んでいないと思われるため、今後も積極的に研究に取り組んでいきたい。

略号一覧

例文のグロスにおいては以下の略号を用いている。

1	一人称	NOM	主格
2	二人称	PFV	完了体
3	三人称	PL	複数
ACC	対格	PRS	現在時制
CON	接続詞	PST	過去時制
DAT	与格	PTCP	分詞
F	女性	REFL	再帰
IPFV	不完了体	REL	関係詞
M	男性	SG	単数

Плюсквамперфект подкарпатского русинского языка: употребления и порядки слов плюсквамперфекта

ТАНАКА Юма

Целью этой статьи является выяснение употребления плюсквамперфекта (давнопрошедшего времени) в подкарпатском русинском языке.

В подкарпатском русинском языке имеется глагольная форма плюсквамперфекта. Хотя об этом упоминает в своих работах несколько исследователей, подробное объяснение данной словоформы отсутствует. В этой статье уделяется особое внимание значениям и порядкам слов плюсквамперфекта.

В первом разделе раскрывается основная теоретическая направленность представленной статьи.

Во втором разделе анализируется значение плюсквамперфекта, обращая внимание на вид глаголов плюсквамперфекта. В подкарпатском русинском языке первым влияющим на

значение и способы употребления плюсквамперфекта элементом является вид глаголов. Форма плюсквамперфекта глаголов несовершенного вида показывает значение простого предшествования к действию в прошлом, указанному в главном предложении, в предшествующем предложении, или в контексте, а форма плюсквамперфекта глаголов совершенного вида – значение совершенности, то есть результат или следствие действия, совершённого до какого-то момента в прошлом. В третьем разделе дается анализ порядка слов плюсквамперфекта и формы прошедшего времени, которая представляет собой основу плюсквамперфекта. В связи с тем, что форма плюсквамперфекта состоит из более двух слов, так же существует несколько вариантов построения порядков слов в предложении. В ходе проведения исследования было уделено внимание на синтаксические компоненты в предложении. Были установлены некоторые тенденции, определяющие порядок слов, а также исключения из общего принципа. Возможно, характеристиками клитиков объясняются эти исключения, и именно клитики являются главным определяющим порядок слов элементом.

В четвертом разделе раскрываются основные проблемы, обозначенные автором в статье. Сложности вызывает недостаток примеров плюсквамперфекта, а также исследования клитиков в русинском языке.